

ART KISS LETTER

熊本市現代美術館 アート・キッスレター

2018冬
vol.83



賞のくまもと展 出品作家の皆さん

巻頭言

美術展の新たな領域への試み

時代は常に変化し、その反映でもある芸術作品も常に新しい価値観を生み出しています。芸術家は、既成の領域を常に越え、国境や文化の壁を越え、過去や未来へと自由に行き来します。歴史や伝統は、現在と結びつくことにより、新しい創造が生み出されます。開館15周年を記念した当館の「賞のくまもと展」も、先端を行く現代の美術家を扱いながら、深く熊本の歴史と結びつき、地震後の今と未来を見据えています。

今の世界の不安定な情勢の中で、新たな美術の領域を超えようとする動きは、9月に訪れたヴェネチア・ビエンナーレ2017でも顕著に見ることができました。ビエンナーレの最高賞を受賞したドイツ館は、物とイメージと身体と音楽の見事な融合が高く評価されました。ドイツ館の建築そのものを強く意識し、時間芸術が込められた劇的な展示空間が実現していました。

フランス館も「スタジオ・ヴェネチア」と題し、マイク、スピーカー、楽器が並ぶバウハウス風の録音スタジオと化していました。会期中、世界各国からミュージシャンがこの脱構築の集積のようなスタジオに集まり、演奏録音が行われ、まさに視覚芸術と音楽の合体が試みられていたのです。

同じ時期、EU離脱で揺れるロンドンでも、ヴィクトリア&アルバート美術館において連日長蛇の列ができ、美術展の概念を超える展覧会が開催されていました。それは伝説的なロック・グループ「ピンク・フロイド」の展覧会であり、すべての観客はヘッドホンをつけ、一步会場に立ち入るとロックが鳴り響き、半世紀にわたる彼らのグループの歴史の変遷に誘われるのです。コンサートに関わるステイジやポスター等のあらゆるデザイン、高度のテクノロジーを駆使した光のアート、歴史を検証するトーク、そして音響が融合する極めて密度の高い展示空間が造り上げられています。それはこの先の見えにくい対立と分断の時代に、美術の世界に新たな可能性を示すものでした。

熊本市現代美術館館長 桜井武

Contemporary Art Museum, Kumamoto

2017.12.16[土] - 2018.3.18[日]

熊本城×特撮美術 天守再現プロジェクト展

CAMK
www.camk.or.jp

MUSEUM INFORMATION

2017 JUN-SEP

三沢厚彦 ANIMALS in 熊本

2017.7.1

三沢厚彦 ANIMALS in 熊本 プレマ・ファミリートゥア

アニマルズ展の関連イベントとして、プレマ・ファミリートゥアを開催しました。今回は総勢30名を超える大所帯！2班に分かれてのツアーとなりました。美術館でのマナーの約束をして、さっそく展示室へ。日用品を寄せ集めて作った初期作品にまず目を奪われ、アニマルズシリーズが見えてくると、みなさんのテンションもどんどん上がっていきま



す。前から後から、親子でよく観察していました。「いい香りがしますね」「同じ部屋に他にも動物がいるから探してみたい」といった学芸員からの呼びかけに、匂いに注意してみたり、大

人も子どももキョロキョロして探したり、「見つけた！」とそろって指さしをしていました。親子で手を握って、一緒に彫刻作品を見つめる姿がとてもほほえましい場面も。ツアー後も展示室をもう一巡される親子も

ワークショップ

2017.7.17

「動物の顔はめ看板で遊ぼう」

アニマルズ展の関連企画として、熊本市動物園ワークショップ「動物の顔はめ看板で遊ぼう」を開催しました！猛暑のなかでの開催にもかかわらず、多くの方にご参加いただきました。



熊本で活躍するアーティストのアドさんが描いた動物の絵にスタンプで模様を加えていきました。スタンプの種類は、水しぶき、葉っぱ、毛

しぶき、キンシコウのパネルに葉っぱ、シフゾウのパネルに毛なみをそれぞれスタンプしていきます。写真撮影も「もつと口をあけてみよう」など、工夫して存分に楽しんでいただきました！現在は部分開園のため、キンシコウなどはまだ見ることができませんが、今回のワークショップを通して、「元氣かな」と気にかけていただく機会が増えるといいなと思っています。今後も完成したパネルは動物資料館に設置します。動物園にお越しの際は、ぜひご覧になってくださいね。(A・M)

【参加人数80人】

2017.7.22-23

木彫ワークショップ

アニマルズ展の関連企画として、三沢厚彦さんによる木彫ワークショップを開催しました。小学生から70代まで、幅広い年代の方にご参加いただきました。



まずは自分に合ったサイズの木材を選び、作りたいものを紙にスケッチしていきます。正面だけでなく、横・

月曜ロードショー上映報告

毎週月曜日14時・17時より
上映リスト(6/26/9/18) *9月18日は休止

- 6月26日 『恋愛適齢期』 2003年 アメリカ映画 128分
- 7月3日 『プロウ』 2001年 アメリカ映画 123分
- 7月10日 『エンゼル・ハート』 1987年 アメリカ映画 113分
- 7月17日 『シージャック』 2012年 デンマーク映画 103分
- 7月24日 『ヴァンパイア』 1932年 フランス・ドイツ映画 71分
- 7月31日 『ティム・バートンのコープスライド』 2005年 アメリカ映画 77分 *日本語吹替版

【特集】台湾映画 侯孝賢 & 李安

- 8月7日 『恋恋風塵』 1987年 台湾映画 110分
- 8月14日 『冬の夏休み』 1984年 台湾映画 98分
- 8月21日 『推手』 1991年 台湾映画 105分
- 8月28日 『恋人たちの食卓』 1994年 台湾映画 124分
- 8月24日 『ターシフト・ターシフト』 2003年 香港・シンガポール映画 99分
- 9月4日 『ラテンアメリカ光と影の詩』 1992年 アルゼンチン・フランス映画 133分
- 9月11日 『二十四時間の情事』 1959年 フランス・日本映画 91分

*日台交流サミットin熊本開催記念特別上映会

商店街ナイトツアー

2017.8.16-19



上・下・後から見た図も考えてみます。それを実際に角材に書き写し、ノコギリやノミをつかって大まかな形を切り出し、線をつなぐようにしてさらに削り出していきます。

2日目は、描いたラインを修正しながら削り、イメージした形に近づけていきます。「すつと削れる感触が楽しい」「木の節が思っていた流れとちがってうまく削れない」など、それぞれ道具や素材の特性をつかみ始めた様子が見られました。最後には、魚の浮彫りのレリーフや、四足の熊、バク首像など、個性豊かな作品が揃いました！参加者のなかには「早く家で続きをしたい！」と言う方もいて、皆さん心地よい疲労感と達成感に、満足げな表情で会場を後にされました。(A・M)

【参加人数15人】

(A・S)

【参加人数42人】

中、たくさんの方にご参加いただきました。「美術館入口のパナールが気になって」という声が多く聞かれましたが、実際に間近で見ると作品の大きさに皆さん驚かれました。

スペイン・ギャラリートーク

熊本市動植物園から獣医師の上野明日香さんをお招きし、当館の坂本学芸員とペアで展覧会を案内する「スペイン・ギャラリートーク」を開催しました。会場内の作品に合わせて、坂本学芸員からは素材や表現方法のお話を、上野さんからは、モチーフとなる動物の実際の生態について様々なお話が紹介されました。上野さんは動植物園にいる動物の写真を見せたり、実際のワニの皮などを触ってもらったりしながらわかりやすく説明され、今まで知らなかった動物の習性を知るたびに、会場からは「おおー」と声があがっていました。普段のギャラリートークとまた違う見方に、ご参加の皆さんも夢中になっていました。(A・M) 【参加人数40人】



講演会

「熊本市動植物園はいま」



スペイン・ギャラリートークに引き続き、獣医師の上野明日香さんに、熊本地震以後の熊本市動植物園の様子をお話いただきました。14日の地震後すぐ、上野さんは園の動物たちやスタッフの安否確認、設備の破損の状況確認や、「ライオンが逃げ出した」というデマ対応などに、余震が続くなか奔走していました。さらに、16日の本震によって、園内の液状化など状況は悪化。猛獣舎の被害のため、トラやユキヒヨウなどを他の動物園に移動する準備をするなど、スタッフの食料が少なくなっていることを後から気が付くほどに、迅速な対応に迫られる日々だったそうです。

地震後は、被災したときと同じ場所にいるのを嫌がるなど、半年間にもわたって異変が見られた動物もいたとのことで、そのケアに努めてきたことが紹介されました。上野さんをはじめ、熊本市動植物園のスタッフがいかに動物を愛し、熊本地震以降も真摯に対応されていたかがわかる貴重な講演会となりました。(A・M) 【参加人数50人】

最終ギャラリートークと入場者2万人突破

アニマルズ展最終日のギャラリートークは、三沢厚彦さんご本人をお迎えして実施され、多くの方にご来場いただきました。三沢さんの作品制作や展示の実際について、作品に取り囲まれる中で何うお話しは、とても興味深く、皆さん熱心に耳を傾けておられました。またこの日、入場者が2万人を突破し、最終的に20,839人の方にご来場いただきました。(A・S)

【トーク参加人数1000人】



CAMK人形劇

「かちかち山」

今年も夏休み最後の日に、劇団パレットさんによるCAMK人形劇「かちかち山」を開催。たっくさんの子どもたちが集まってくれました。劇が始まるとタヌキとウサギの掛け合いに皆たちまち引き込まれていきました。劇終了後に劇団の方全員でご挨拶されると、「え、3人!?!」もっ

アートバス・アウトリーチ

芳野小学校1・2年生アートバス



2017年1校目のアートバスは、芳野小学校1・2年生の皆さん。探検ツアーのあと、アニマルズ展を鑑賞しました。みんな自然に動物と同じポーズをとってみたい、よつんばいになり、ごろりと寝転んでみたい。体全体をつかって、作品を「模写」しているようでした。お昼からは、紙粘土を使った「アニマルズ」づくり。迫力あるワニや、えものを狙うトラなど、様々な作品ができあがりました。「1・2年生なのに、細かいところをよく見て、立体的に作っているのびっくり!」と先生方も驚

から驚きの声もあがっていました。お子さんから大人まで楽しめる会となりました。(A・T) 【参加人数116人】



かれていました。(A・S)

【参加人数32人】

西原小学校2年生アートバス

西原小2年生116人の皆さんが、アートバスで来館してくれました。クラスごとに分かれ、探検ツアーやアニマルズ展のギャラリートークを楽しみました。やはりアニマルズは大人気で、動物たちと背比べする人や、ワニの歯の本数を数えている人もいました。学校に帰って、絵や感想を描いて、さっそく美術館に届けてくれました。また美術館でお待ちしています!(A・S)

【参加人数116人】



GⅢ vol.117 「有田巧 熊本日々」展



有田巧さんの水彩画展「有田巧 熊本日々」展を開催しました。本展では、熊本の古い街並みを描いた約40点の水彩画を2010年からの作品群とともに、シリーズ最新作を展示しました。水彩の持ち味である、のびやかでみずみずしい色彩や、紙の吸い込みやにじみを生かして描かれた、古い家屋の表現の繊細さに、皆さん熱心に見入っていました。(K・O)

GⅢ vol.117
2017.7.9

「有田巧 熊本日々」展 アーティストトーク& 水彩画ワークショップ

画家の有田巧さんに、本展出品作品である水彩画「熊本日々」シリーズについてお話いただきました。アーティストトークは展示会場内で行われ、実際の作品を見ながら、水彩画で細いペンで描くことを選んだ理由



や、展示の配置の説明 (基本は制作年順)、スケッチしている最中の

建物の店主との交流エピソードまで、盛り沢山な内容でした。展示作品で使われている紙は4種類、紙と絵具の相性、色の滲み方にそれぞれ違いがあることなどもお話いただきました。

続く水彩画ワークショップは、「オバケを描こう」というテーマで、色紙に水彩絵の具で描く内容でした。有田さんが様々な画家による「オバケ」の参考資料(ピカソやルドン、妖怪など含む)を紹介し、参加者それぞれが自分のオバケのイメージを膨らませて、それぞれの創作で描きました。色紙に描くということで、絵の具のじみの表現をどのよう



に活かすかなど有田さんからの個別指導もあり、大人から子どもまで、皆さん集中して描いていました。完成後、担当学芸員が、華やかな色遣いから繊細な描写まで、個性豊かな「オバケ」作品の魅力を読み解くミニトークを行いました。(H・T)

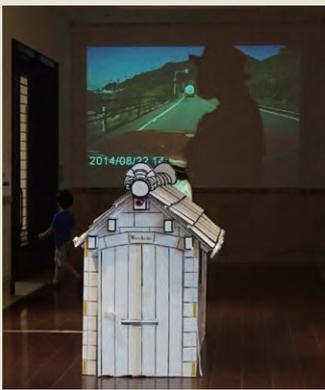
【参加人数30人】

GⅢ vol.118 「風を待たずに」 村上慧、牛嶋均、坂口 恭平の実践」

ギャラリーⅢ・井手宣通記念ギャラリーで、GⅢ vol.118「風を待たずに」——村上慧、牛嶋均、坂口恭平の「実践」を開催しました。本展では、私たちが生きる状況について思考し続けている3人の作家の実践を紹介しました。

村上慧さんは全7点を会場全体にわたって展示。2014年から始めた家をせおって歩く《移住を生活する》からは、実際に村上さんがせおっている家、2017年8月に熊本で生活していた中で描かれたドローイングなど、2014年から本展開催に至るまでの作品60点が展開されています。

牛嶋均さんの《ジャングルグロブ》は、かつて牛嶋さんの工場で製造したと考えられる廃棄された遊具3点を連結したもので、元々遊具だったものを複合ビル3階にある美術館の中に登場させることで、私たちの足元には地面があることを思い起こ



させます。

当館コレクションからは坂口恭平さんの《坂口自邸》を紹介。初日には、坂口さん本人ものぞきに来てくれました。坂口さんは、当館から徒歩5分の場所に2017年8月から実施している「モバイルハウス計画in上通」で、2点のモバイルハウスを新たにつくられています。2009年に制作された当館所蔵の《坂口自邸》は、そのプロトタイプの一つです。「自邸」と対面した坂口さんの表情は、まるで久々に帰宅したときのような嬉しさと安堵感を伴っているようでした。(M・I)

2017.9.1

「風を待たずに」 ナイトトーク

「風を待たずに」——村上慧、牛嶋均、坂口恭平の「実践」に関連して、出品作家の村上慧さんと牛嶋均さんによるトークを開催しました。

前半は牛嶋さん、村上さんに、それぞれ、これまでの経緯を含めた制作活動について話していただきました。牛嶋さんは田中浜さんに出会った後、ヨーロッパ各地でパフォーマンスをするようになり、帰国後、実家の遊具製造を手伝ううちに、遊具の作品化を考えるようになったそう



です。村上さんは、子どもの頃から虫が好きで、毛虫の種類や特徴についてよく知っていた自分と、「毛虫」という概念しか知らない同級生とのやりとりを例に話を始め、大量の出来事を抱えている「現場」と、一括りにする「システム」との解離について話されました。

後半は展示会場へ。それぞれの作品を前に、ギャラリートークを行いました。まずは村上さんが実際にせおって生活している家や熊本での生活について、実物や写真、ドローイングなどで紹介。また、《移住を生活する》をスライドプロジェクトで上映した作品も、特別に上映しました。牛嶋さんは実際に作品に登って、遊具についての話となりました。参加者の方々も特別に中をくぐり抜けたり、登ってみたりしながら、身体を動かしているうちに、自然と質問や会話が飛び交う場になりました。(M・I)

【参加人数35人】

夏の収蔵作品展

「CAMK ANIMALS」

同時期に開催していた「三沢厚彦 ANIMALS in 熊本」展に関連し、井手宣通記念ギャラリーにおける夏の収蔵作品展として、動物や生き物をテーマにした作品を展示しました。身近な生き物から動物園で見られないもの、そして空想・異形の生き物まで、様々な動物モチーフの作品を収蔵作品の中から選びました。11人の作家22点をご紹介しますが、素材・技法に関しても、油彩やイラスト、型染、陶芸に彫刻、篆刻と、非常にヴァリエーション豊かなものでした。一生をかけて取り組むべき画題として動物を選んだ作家もいれば、素材の形から動物の姿をイメージし、造形につなげていった作家もいます。現代アートの多様な表現を「動物」というテーマを通じてお楽しみいただけます。ではないでしょうか。(Mi・I)



子どもたちのためのイベントを開催しています
街なか子育てひろば

2017.7.20

7月ワークショップ

「お話会と親子遊び」

今回は読みがたりボランティアと
しても活動するおはなしポットさん

をお招きし、

読み聞かせと

親子で楽しめる

指遊びを教え

てもらいます。

参加者

全員で輪にな

って座り、

近くのお友達

と絵本を指さ

し「これは何

だろう?」とコ

ミュニケーション

を取り、子ども

たちはたくさん

の話を聞いただけ

でなく、ジャン

プをする絵本の

内容に合わせて

ジャンプをしたり

、綺麗な布を広

げたり。色鮮やか

な布がひらひら

舞う様子に子ども

たちも大喜びで

した。体を動か

しながらお話を

楽しみ、終始笑顔

に包まれたひと

ときでした。(S・K)

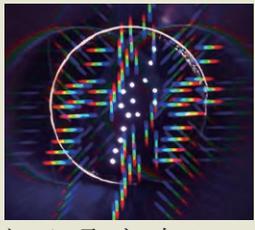
【参加人数14人】



2017.8.24

8月ワークショップ

「親子でおもちゃづくり」



今回のワーク
ショップでは、
身近にあるもの
を使って大人も
子どもも楽しめ
るおもちゃを作
りました。最初

に作ったのは万華鏡。

なんだか作るのが

難しいのですが、

用意するものは

紙コップ3つと黒

い紙、文房具店

などで手に入る

分光シートだけ。講

を立て、外側部

分をペンで思い

いに色塗りしま

す。最後に虹色

の穴をあけて

みると…中には

虹色の光が！これ

にはお子さん

だけでなく、

親御さんたち

からも歓声があ

がっていました。

次に作ったのは

ぶぶんぶぶん

とゴマと呼ば

れるおもちゃ。

用意するもの

は牛乳パックの

底を切り取った

ものと紐です。

作り方はとて

もシンプルで、

牛乳パックの

中心部分に2つ

穴をあけ、そ

こに紐を通す

だけ。このコマ

は回し続ける

のにちよつと

コツがいるよ

うで、親子で

協力して回し方

を研究する姿

があちこちに見

られました。(K・M)

【参加人数30人】



2017.9.21

9月ワークショップ

「わくわくりトミック」

今回は「わくわくりトミック」。出
張音楽活動を行っているWAIWAI
ランドの方を講師に、親子で音楽に合
わせて楽しく体を動かしました。6か
月〜3歳までのお子さんとお母さんが
参加してくれました。まずは「世界
中の子どもたちが」のメロディーに
合わせて足踏み。手を握って歩いて
みたり、親子でちょっと体をほぐし
ます。手あそびでは、先生からは「ま
だお話しないうちさん聞いてわか
るので、きちんと教えてあげてくだ

さいね」とい

う声かけもあ

り、顔の部分

を「鼻」「口」

「目」など声

に出しながら

触っていきま

した。たくさ

ん触れあつ

て、お母さん

も子どもたち

もとってもう

れしそうな様

子。お母さん

とお母さんが

触れ合いながら

体を動かすリト

ミックに移ると、

子どもたちは

ワクワク。

お母さんの膝

にお子さんが

乗って、バス

やボート、馬、

飛行機など、

様々な乗り物

になりきって

体を揺らすと、

子どもたちも

声を上げて喜

んでいます。音

楽に合わせて

体をいっぱい

動かしたり、

ふれあったり、

親子の仲がより

深まるワーク

ショップとな

りました。(A・M)

【参加人数39人】



展示会や季節にあわせたコンサートを開催しています
ミュージック・ウエーブ

2017.7.22

STREET ART.

PLEX KUMAMOTO

Jazz Open 2017

Jazz Open は今年で15回目を数え

る九州最大規模の路上ジャズフェス

ティバル。九州を中心に、韓国や東

京・大阪など様々な地域からジャズ

ミュージシャンが一堂に会し、熊本

市街地の路上
数ヶ所で演奏
が繰り広げら
れます。

現代美術館

会場の出演者

は、豊田隆博

、To + 藤本直

子、豊田隆博

(Dr)、村上明

(Ds)、吉村健

秀 (Drms)

のベテラント

リオに藤本直子

(Co) が加わり、

パワフルな演奏

で来場者の皆

さんを魅了

しました。最初

はトリオのみの

演奏からスタート

。軽やかで疾

走感のある曲

に始まり、ラ

テンのリズム

で会場を盛り

上げると、朝

の爽やかさを

感じさせる曲

へと向かいます。

さらに、ポー

カルの藤本

さんが加わり

と、ロマンチ

ックなバラド

や、のびのある

歌声を生か

した力強い曲

々。演奏曲は、

「Central Park West」

「On The Sunny Side of The Street」

「Caraven」

「LOVE」



【参加人数300人】

詩の朗読会

第162回「彫る・刻む」【参加人数10人】

第163回「いのち～夏休みこどもの詩特集～」【参加人数9人】

第164回「物語」【参加人数8人】



当館ボランティアによる子ども向け読みきかせ

CAMK読みがたり

第94回「かわいいどうぶつ」【参加人数16人】

第95回「おばけだぞ」【参加人数35人】

第96回「なかよし」【参加人数11人】



アンケートに寄せられた感想(抜粋)を紹介します

Visitor's letter

三沢厚彦 ANIMALS in 熊本

■実物の彫刻を間近で見ると、素材をノミで削った跡がはっきりと見えて、写真で見ると違い、作者の息遣いのようなものが確かに感じられた。(市外30代男性)

■子どもに身近な題材で、子どもも大人も楽しめました。いろんな表現方法がある事を知り、世界が広がりました。(市外40代女性)

開館15周年記念 誉のくまもと展

■作家の方々の死生観、真摯に社会を見つめて表現しようとする試みを続けている創作への姿勢が素晴らしい。(市外40代女性)

GⅢ vol.117 有田巧 熊本日々

■フレスコ画を描かれている有田先生の水彩画スケッチを今回の展覧会でたくさん見ることが出来て嬉しかったです。レンガや窓の色の深みや、にじみがとってもきれいでした。私もゆっくり時間を使って水彩画を描いてみたいと思いました。(市内10代女性)

GⅢ vol.118 風を待たずに——村上慧、牛嶋均、坂口恭平の実践

■「家とは何か」という視点を持ち、社会の中での個人の在り方について気にするようになりました。(市内40代男性)

■ドローイングの繊細さと家を持ち歩くという大胆な発想が素晴らしい。(市内40代女性)

ART DE GYAN

アート・どぎゃん

熊本弁で「アートはどうなの？」
という意味です

川内倫子 Halo 展

橙書店

熊本市中央区練兵町54

096-355-1276

当館所蔵作家でもある写真

家の川内倫子の個展。作品集

「Halo」の出版記念として開催。

新作・近作5点が並ぶ。イギリ

スの渡鳥の群れ、中国の火花の

祭り、日本の神社の一角など、

世界各地の様々な出来事が川内

2017.9.1-9.24



によって
繕い合さ
れ繋がっ
ていく、
まさに川
内ならで
はの作品
世界、展
示空間で
ある。当
館で発表
した「川
が私を受
け入れて
くれた」

は光に満ちた印象の作品集・作
品集だったが、「Halo」は暗色・

黒の印象的な作品集・作品集で

あり、作家のとどまらぬ展開が

明らかである。(H・T)

世界を旅して

画廊喫茶 二点鐘

熊本市中央区手取本町3-8有明ビル3F

090-1708-7715

旅がしたい。画廊喫茶のオー

ナー橋本葵さんのそんな思いか

ら企画された「旅」をテーマと

する展覧会である。10名の作家

による日本、アジア、ヨーロッ

パ各地の絵画による「旅行記」

を頼りに、場所も季節も天候も

超えて我々は東の間の旅行に出

かけるのだ。作品は水彩・油彩・

ペン画といった様々な手法で

描かれており、作家の違い、さ

らには同じ作家の作品でのタッ

以下、当館学芸員実習生
による取材記事をあわせ
て掲載します。

2017.8.17-31

チの違いもあり、バラエティに
富む展示であった。北アルプス
の包み込むような黄葉、タイの
瑞々しい緑の木々、トルコの涼
やかな宵の月。多彩な技法や画
材が織りなす「旅行記」からは、
作家が体験したその土地の空気
の色が滲み出る。旅で得た感動
を的確に表そうと、表現一つ一



つに丁寧に向き合い制作されて
いる。我々の東の間の旅の余韻
は、真摯に作られた作品から漂
う空気の色に残り続けるのだ。
(橋詰和弥/島田智加)

原画展ギユスターヴくん

長崎書店

熊本市中央区上通町6-23

096-353-0955

画家ヒグチユウコによる絵本

「ギユスターヴくん」の原画展。

昨年好評を博した、絵本『せか

いいのねこ』の原画展に続き、

長崎書展では2回目の展示。ヒ

グチ氏の作品は、しばしば猫を

モチーフとし、ペンによる細密

なハッチングや点描と透明水彩

で表すシュールな世界を特徴と

する。女性をはじめ猫好きの



方など
にも人
気の作
家であ
り、偶
然に立
ち寄っ
て作品
を見る
ことが

できたというファンや、今回初
めて作家の作品に触れて、画面
の濃密さに圧倒される方も見ら
れた様子であった。原画からは、
印刷媒体ではわからない、生き
物の鱗や毛並みの表現などにお
けるペンの細さや、ごくうすく
溶いた絵の具が慎重に置かれて
いる様子を感じられた。

(三仙千尋/田中優花)

ギャラリーⅢで開催した「OOの食卓」展が、2017年度のグッドデザイン賞を受賞しました!



編集後記

展覧会の事前調査のために上海に二週間行ってきました。あちらの人に「熊本から来ました」と自己紹介すると、多くの人の反応は「くまモンがいるあの熊本か!?!」。わが県のしあわせ部長は上海でもたいへんな人気者で、街の一等地にくまモンカフェ(公式)が建てられるほど。熊本の第一イメージといえば、お城でもなく、地震でもなく、圧倒的にくまモンなのでした。ゆるキャラおそろべし。次行くときのおみやげはくまモングッズにしようと思いました。

編集長 佐々木玄太郎

夏といえばワークショップ!ということで7-8月の当館では、三沢厚彦さんの「木彫ワークショップ」や、有田巧さんによる「水彩画ワークショップ」、子育てひろばの「親子でおもちゃ作り」など、大人も子どもも創作の楽しさを体感していただけるイベントが目白押しでした。創作系ワークショップの魅力は、美術や創作の楽しみを味見できることだと思います。初体験でたとえ完璧に作れなくても、経験をした!という事だけでも刺激的な体験です。終了後には、意外とできる自分を発見して、心がほくほくと暖まったような気持ちになりますよ!

担当 大田黒翔代

[執筆者一覧]*原稿の文末にイニシャル表記
 富澤治子(H・T) [熊本市現代美術館主任学芸員]
 坂本顕子(A・S) [熊本市現代美術館主任学芸員]
 池澤茉莉(Mi・I) [熊本市現代美術館学芸員]
 岩崎美千子(Mi・I) [熊本市現代美術館学芸員]
 大田黒翔代(K・O) [熊本市現代美術館学芸アシスタント]
 村上綾(A・M) [熊本市現代美術館学芸アシスタント]
 三浦和紗(K・M) [熊本市現代美術館学芸アシスタント]
 手嶋彩香(A・T) [熊本市現代美術館学芸アシスタント]
 草津翔子(S・K) [熊本市現代美術館総務アシスタント]

ART KISS LETTER アート・キッスレター

vol.83冬号(2018年1月)

【無料】

発行人: 桜井武

編集: 佐々木玄太郎 大田黒翔代

デザイン: 石井克昌 (MOTOSHIKI)

印刷: シモダ印刷

発行: 熊本市現代美術館

http://www.camk.or.jp

〒860-0845 熊本市中央区上通町2-3

電話 096-278-7500 FAX 096-359-7892

【次号は初春号(2月発行予定)】

第47回同光會書展

アートスペース大宝堂

熊本市中央区上通5-6

096-354-2155

福岡教育大学書道科OBと在生による書展。今回のテーマは「創(つくる)」。テーマに沿った個性豊かな作品が34点展示されていた。《老子句》や《臨蘭亭叙》などの著名な古典を書いた作品から、荒巻雅代さんの《MUの可能性》のように墨の濃淡を生かして書かれた、文字というより絵といえるような作品もあった。また文字の書き方も多様である。特に川邊直子さんの《工夫》は一見何が書いてあるかわからない小さな作品だが、よく見るとひらがなで「くふう」と書いてある。書く道具が工夫された作品もあった。特別におもしろかったのは古川宏さんの《空然一落》。力強いタッチが特徴的だが、この作品では筆の代わりにタオルを使用したというので驚いた。また、奥田

2017.8.16-8.21



美枝子さんの《情熱》は朱色の目を引く紙に濃く太い字で書かれているのがとても印象に残った。書道に親しみの人でも

見て楽しむことができる展覧会であった。(山下葵/橋口紗歩)

故きを温めてジュエリー個展

熊本県伝統工芸館

熊本市中央区千葉城町3-35

096-324-4930

2017.8.15-20

今回私たちは、熊本県伝統工芸館にて行われている個展、「故きを温めてジュエリー個展」を取材した。そこで私たちは、制作者である石坂さんに今回



の個展についてお話を伺った。今回の個展のコンセプトは、手作りこだわり周りの造形

に流されず、作品全てがオリジナルという事である。作品の中にゴミをコンセプトに制作した物があり、本のページが捲れた様子を捉えた物や、水たまりに溜まっているゴミが光っている様子を捉えた作品があり、コンセプトの選び方が面白かった。石坂さんは伝統工芸館の設立以前から個展を開いており、気持ち次第でこだわりが変わるので、その都度作品のテーマやコンセプトは変わっているとのことだ。我々がこの個展で感じたことは、手作りだからこその出る味もあり、どの様な材料でも

表現方法は人によって様々であるという事である。

(古川翔/甘浦伊吹)

「土のカタチ」展

熊本県伝統工芸館

熊本市中央区千葉城町3-35

096-324-4930

2017.8.15-20



妖怪や少女などについて作品を生み出す、植木町在住の陶人形作家にしだみきの展覧

いしかわの新鋭作家展

熊本県伝統工芸館

熊本市中央区千葉城町3-35

096-324-4930

2017.9.1-9.24

石川県の伝統を受け継ぎ、これから担っていく新鋭作家の作品を漆芸を中心に展示販売。作品の数はおよそ100点。沈金師の芝山佳範氏による漆器がおもしろい。恵比寿様やリス、ムカデなど変わったものを

会。展示されている大小様々な300点以上の作品はどれも購入可能である。写真の「七福神」は、どれも表情豊かで、今にも話しかけてきそうである。粘土が乾燥し、固まってしまう前の僅かな時間で形づくられたとは思えないほど細かく朗らかな表情とその雰囲気からは、優しく可愛らしい印象を受けた。また、作品全体を通して感じられるふっくらとした質感は、見る者の気持ちを温かくさせる。(山口悠波/川浪美)



モチーフにして、現代風の作品を生み出している。彼は熊本大地震後に仲間呼びかけてチャリティ販売会を行い売上全額を熊本県に寄付した。他にも絹糸を編んだレースに金箔をあしらったアクセサリーなどもあった。2Fでは石川県の加賀象嵌と熊本県の肥後象嵌を展示した、石川県立伝統産業工芸館との交流展が開催されていた。(小平真綺/坂田鈴蘭)

2017.9.16-11.26

誉のくまもと展開催

開館15周年を記念した企画展「誉のくまもと展」を開催しました。本展には国際的に活躍する現代美術家や写真家、イラストレーターなど14名と1グループが参加し、総出品点数は約140点。うち、5名のアーティストたちが「熊本城」や「生人形」「肥後六花」、「石牟礼道子」など熊本ならではのテーマのもとコミッションワークに取り組み、本展で最新作として初公開しました。

また、当館は開館より生人形研究を継続してきましたが、本展では「市民文化に寄り添う生人形」をテーマに新発見の作品・資料をご紹介します。



今回の展覧会は、私たちの生活や価値観を大きく変えた熊本地震のみに留まらず、全国で頻発する災害、「広島」「水俣」「3.11」に一人の人間としてどのように向き合うのかを、現代美術家たちの作品を通じて見つめなおす内容となっています。(H・T)

2017.9.17

オープニングアーティストトーク 宮島達男・石内都・石川直樹



誉のくまもと展オープニングアーティストトークとして、現代美術家の宮島達男さん、写真家の石内都さん、石川直樹さんに「写真で表現す

るということについて」というテーマのお話いただきました。最初にスライドを見ながら、それぞれの最近の個展や活動などを紹介。続いて、アーティストを志すようになったきっかけ、代表作や新作についてなど様々な興味深いお話をいただきました。本展をきっかけに、初めてじっくりと対話した3人(宮島さんと石内さんは初対面)でしたが、作品展示のための数日間を通じて親しく気持ちを通じたよう、来場者質問後に行った3人でのフリートークでは、丁寧なやりとりで盛り上がり、笑い声の絶えない時間となりました。(H・T) 【参加人数100人】

2017.9.16-18

寺田克也 公開制作 ミニトーク・サイン会

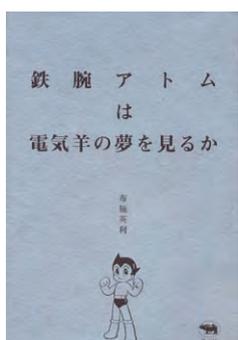
9月16日〜18日(17日は台風のため休館)の2日間にわたり、漫画家・イラストレーターの寺田克也さんの公開制作が行われました。当館からのリクエストは「熊本城を描いてほ



ホームギャラリーからのお便り

ホームギャラリーからおすすめの一冊をご紹介します

VOL.34 『鉄腕アトムは電気羊の夢を見るか』



著者:布施英利
出版:晶文社 2003年

『鉄腕アトム』。その名を聞いて知らない人は日本にいないであろう。今では日本を代表する文化となり、経済にも大きな影響を与えている漫画・アニメを、世界に広げていく先駆けとなった作品だ。そしてその生

しい!。わくわくしながらの作画スタートでした。

空中に浮かぶ美女と、清正公の兜らしきものが描かれ、獅子(狛犬)や鳥が周辺を飛び回る様子が描かれて初日終了。見学者と和やかに会話をしながらの作画でした。台風明けの18日は、昼食もさておき作画に集中する様子でした。獅子や鳥がさらに登場、作画の最終盤には、熊本城が登場!獅子が天守閣を背負い、きりりと守る様子がキュートです。画面中央の美女はまるで、熊本城の復旧を、母鳥がひな鳥を愛情深く守るように見守る女神さながらです。

公開制作終了後に、寺田さんと旧知の崇城大学の小川剛さんを飛び入りゲストに

サイン会を開催。出品作品や生人形を見た感想などをまざままお話いただきました。事前申込制で開催したサイン会も和気あいあいとした雰囲気でした。長年のファンがサイン用に持参した書籍に、寺田さんが「こんなの持っているの?」と喜び驚くシーンも多々ありました。(H・T) 【サイン会参加人数49人】



みの親である手塚治虫もまた、多くの人たちに衝撃を与えていった。『鉄腕アトム』は間違いなく日本に、そして世界に大きな変化を与えた作品と言える。

アトムの物語の舞台は2003年、科学技術が発展した近未来である。そんな輝く未来を多くの人に期待された2003年に、本書『鉄腕アトムは電気羊の夢を見るか』は発行された。本書は、2003年当時のロボット工学とアトムの科学技術を比較することから始まる。そもそもアトムとは、どういったことができるロボットかを分析し、機械的要素は

後半は、「絵画・科学・医学」など共通するキーワードを多くもつ手塚治虫とレオナルド・ダウインチという二人について語られる。時代は異なるが世界に大きな影響を与えた二人。ダウインチもまた一人の漫画家だったのかもしれない。

もちろん、アトムの「心」についても解明しようとする。心理状況を分析する中で出てくるのが、タイトルの「電気羊」だ。電気羊とは、未来における代用ペットとしてのロボットの羊のことである。人がペットの

現在ではソフトバンクのペッパーなどが存在するようになってきたが、その技術の発展は、アトムに憧れそれを作ろうと日々努力を重ねた、多くの人の苦勞があつてこそであった。2003年の技術と現在の発展を比べ、アトムの世界がそう遠くないように感じられる一冊だ。(S・K)